

医療系大学生において大学適応感と自己効力感が主観的幸福感に及ぼす影響

阿久津 洋 巳*, 大 矢 薫, 若 松 直 樹

新潟リハビリテーション大学 医療学部 リハビリテーション学科 リハビリテーション心理学専攻

〔受付：令和元（2019）年9月30日〕

〔受理：令和元（2019）年11月25日〕

キーワード：医療系大学生，主観的幸福感，大学適応感，自己効力感

要旨 大学生の幸福感は，学生生活を充実させる重要な要因であり，健康，大学適応，学業などにも関連する。医療系の大学では，学生は学外の保健医療施設にて長時間実習に携わることに加え，国家試験に向けた受験勉強がある。これら日常的なストレスは，学生の幸福感受到に及ぼすであろう。本研究は医療系大学生の幸福感受到とそれに関連する要因を探るために，主観的幸福感受到，大学適応感，および自己効力感を質問紙調査法によって調べた。一部の学生に対しては，性格特性のBig Fiveの調査を加えた。主観的幸福感受到は，大学適応感および自己効力感と正の相関があった。回帰分析の結果，大学適応感と自己効力感は，独立に主観的幸福感受到に影響することがわかった。性格特性では誠実性が主観的幸福感受到に影響を及ぼしていることが示された。これらの結果から，主観的幸福感受到を増大させるには，大学適応感と自己効力感を上昇させる方策が有効であることが示唆された。

I はじめに

幸福はいつの時代でも万人に共通の関心事であったと想像できるが，人が感じる幸福が科学の対象となったのは比較的近年の1960年代半ばからである¹⁾。人のポジティブな側面に注目するポジティブ心理学の興隆とともに，その研究は広がった。人が感じる幸福は，個人の主観的感覚や気分の側面をあらわす意味で，幸福感受到とか主観的幸福感受到とよばれる。大学生の幸福感受到

は，すくなくとも2つの理由から重要である。

第1は，心の健康の観点からである。小中高校生や社会人と同じく大学生の心の健康は，広く社会一般の国民の健康増進の一部である。主観的幸福感受到は，家族・社会などの特定の領域に対する満足と人生や生活全般に対する満足を含む広い概念であり¹⁾，心の健康と結びついている。

第2に大学生の幸福感受到は大学適応の観点から重要である。大学生の学校適応に関しては，新入生や退・休

* Corresponding author:

新潟リハビリテーション大学 医療学部 リハビリテーション学科 リハビリテーション心理学専攻

〒958-0053 新潟県村上市上の山2-16

Tel: 0254-56-8292

Fax: 0254-56-8291

E-mail: hakutsu@nur.ac.jp

学者の大学生活への適応²⁾や大学不適応と抑うつとの関連³⁾が報告されている。また、学校への適応感を構成する要因として、居心地の良さの感覚、課題と目的的存在、被信頼と受容感、劣等感の無さが指摘されている³⁾。大学が居心地よく友人や教員と良好な人間関係を築いて、目的をもって充実した学生生活を過ごす学生は大学に適応している。このような学生は日々充実した学生生活を送り、幸福感も高いと想像できる。これと反対に、大学に不適応な学生は幸福感が低いであろう。すでに、日本人学生と中国人留学生を比較する研究で、主観的幸福感と学校適応感に関連があることが報告されている⁴⁾。

幸福感に近い概念に自己効力感がある。自己効力感とは、目的を達成するための行動を自分がとれるかどうかの信念であり、行動と感情に影響する⁵⁾。オックスフォード幸福感尺度⁶⁾がその下位因子に、ポジティブ感情体験および人生の満足度とならんで、自己効力感を含めていることから、幸福感と自己効力感の関連の強さがうかがえる。自己効力感には、課題や場面に特異的に行動に影響するものと、課題や場面から独立して長期的、一般的に行動に影響する特性的自己効力感がある。特性的自己効力感とは、性格特性に近い概念であり、主観的幸福感と関連することが報告されている⁷⁾。本論文では、自己効力感という用語は特性的自己効力感を指すものと定義する。

大学生の幸福感は、大学適応感および自己効力感の両方と関連があるが、大学適応感は自己効力感と強い関連があると予想できる。つまり、大学の学業や人間関係が上手くいっている学生は、自分には与えられた課題を達成できるという経験があるし、場面に合わせて適切な行動を取れる経験がある。このような経験は大学入学以前から続く一種の成功経験として繰り返されているのかもしれない。この成功の経験は、一方では高い大学適応感をもたらすし、他方では自己効力感を高めると考えられる。そこで、大学生の幸福感は、大学適応感と自己効力感の両方から影響を受けると推測できるが、これら3変数の関連を明らかにする研究は、筆者たちが調べた範囲ではまだ報告されていない。

主観的幸福感は人の性格特性の影響も受ける。例えば積極的に他人に関ったり、活動的だったりする外向的な人や、他の人と調和することを好む協調性が高い人は幸福感が比較的高いと想像できる。事実、主観的幸福感とBig Fiveの性格特性の関連を調べた研究は、主観的幸福感が外向性、開放性、協調性と正の相関を

持っていることを見出しているが⁸⁾、これら性格特性の間に相関があるかもしれない。Big Fiveの性格特性は基本的には独立であると主張されているが⁹⁾、使用する尺度と対象集団によっては、例えば外向性と調和性や誠実性の間に相関が見出されている¹⁰⁾。そのため、主観的幸福感といくつかの性格特性の実際の相関は、より少ない特性に限られる可能性がある。

大学生の主観的幸福感に影響する個人特性を調べた研究は、上に引用したように多少報告されているが、包括的に理解できるほど多くはない。大学生と一口にいても、そこには様々な大学生がいる。これまでに報告されている幸福感の研究対象者については大学名や所属学部が明記されていないものがほとんどであるが、論文著者の所属と通常の大学における質問紙調査の状況から考えると、多くは人文社会学系の大学生あるいは非医療関連学部の学生と推測できる。医療関連の学部の学生は、生活や目標、大学における課題、学業と就職との関連などの多くの点で人文社会学系の学生とは異なる。見方によっては、異なる母集団と分類できる。大学に対する適応のしやすさにもこうした立場による違いがあると想像できる。したがって、医療系大学生を対象とした主観的幸福感と大学適応感等の研究は、大学生の主観的幸福感一般を理解することに加えて、医療系大学生の学生支援の観点からも重要であるといえる。

本研究は、医療系大学の学生を母集団と考えて、大学生の主観的幸福感に焦点を当てて、大学適応感と特性的自己効力感、さらに性格特性がどの程度主観的幸福感に影響を与えるか検討することを目的とした。

II 対象と方法

1. 調査対象

新潟リハビリテーション大学の1年生40名と2～3年生60名であった(表1)。

2. 方法

1) 質問紙の構成

既存の4つ尺度を研究目的に合わせて修正して使用した。使用した尺度の質問項目と結果で述べる項目母数を尺度の説明に合わせて以下に掲載する。

(1) 主観的幸福感尺度

参考にした主観的幸福感尺度¹¹⁾は12項目からなる主観的幸福感を測定する尺度であり、「人生に対する前向きな気持ち(満足感)」、「自信」、「達成感」、「至福感」、「人生に対する失望(逆転項目)」の5つの領

表 1 学年と専攻別の調査参加者数 (名)

	理学療法学	作業療法学	R.心理学	言語聴覚学
1年生	26	11	3	--
2～3年生	29	9	16	6

言語聴覚学専攻の1年生は募集しなかった。
R.心理学はリハビリテーション心理学の略である。

表 2 主観的幸福感

項目母数

	質問項目	識別	位置
1	あなたは人生が面白いですか。	2.741	-0.611
2	過去と比較して、現在の生活は幸せだと感じますか。	1.026	-0.807
3	ここ数年やってきたことを全体的に見て、幸せを感じていますか。	2.705	-0.546
4	今の調子でやっていけば、これから先のことにも対応できる自信がありますか。	0.896	0.296
5	自分がやろうとしたことはほとんどやりとげていますか。	0.942	0.782
6	自分の人生はやや退屈だと感じていますか。	1.276	-0.266
7	自分の人生には楽しいことが少ないと感じていますか。	2.035	-0.683

(係数の説明) 項目反応理論を適用するに当たって、2母数ロジスティックモデルを適用したので、項目の識別係数と位置係数が得られる。識別係数は、当該項目の識別力の大きさを表わし、位置係数は項目特性曲線がグラフ上の縦軸の反応確率0.5を横切る横軸上の位置を示す。位置係数の数値は特性の推定値であり、これは標準正規分布の横軸と同様に解釈できる。表3、4の識別と数値も同様である。

表 3 大学適応感

項目母数 (1回目)

項目母数 (2回目)

	質問項目	識別	位置	識別	位置
1	この大学にいたら自分がだめになると暗い気持ちになることがありますか。	0.707	-1.045	0.735	-1.026
2	できることなら、転学あるいは転専攻したいと思うことがありますか。	1.105	-0.943	1.048	-0.976
3	大学生活が充実していると感じることが多いですか。	1.084	-0.514	1.324	-0.483
4	現在の専攻に対する興味が深まってきていると感じますか。	0.784	-1.356	0.843	-1.306
5	大学を退学したいと思うことが時々ありますか。	2.054	-0.633	1.705	-0.675
6	入学した専攻が自分に合っていないと思うことが多いですか。	0.545	-1.738	0.414	-2.166
7	この大学が自分に合っていると思うことが多いですか。	1.024	-0.274	1.156	-0.267
8	4年間で卒業できるか不安になることが時々ありますか。	0.173	3.814	削除	削除
9	1時間目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安ですか。	0.336	-2.259	削除	削除
10	授業中、先生の言っている内容がわからなくて、不安になることがありますか。	0.352	0.586	削除	削除
11	成績のことで心配することが、しばしばありますか。	0.244	3.313	削除	削除

域から構成されている。この尺度の信頼性 ($\alpha = 0.84$) と妥当性 (構成概念妥当性) は確認されている。この尺度から7項目 (満足感3項目、自信2項目、失望感2項目) を選び、適宜表現を修正して質問紙を作成した。項目は、論文に記載された主成分の大きさと大学生への適合性を考慮して選択した。回答は「はい」と「いいえ」の2件法で求めた。回答を2件法に変更したのは、回答しやすさと比較的少ない調査参加

者のデータに項目反応理論を適用するためであった。本研究で使用したほかの尺度も同じ理由で2件法による回答とした。表2に質問項目を示した。

(2) 大学適応感尺度

参考にした大学生不安尺度¹²⁾ は大学生の大学生活不安を測定する30項目からなる尺度であり、「日常生活不安」に14項目、「試験不安」に11項目、「大学不適應」に5項目をもつ3因子からなる。この尺度の信頼

表4 自己効力感

項目母数

	質問項目	識別	位置	識別	位置
1	何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうですか。	0.735	0.321	0.731	0.321
2	新しいことを始めようとしても、出だしてつまずくとすぐにあきらめてしまいますか。	0.929	-0.424	0.940	-0.421
3	友人より優れた能力があると感じることが多いですか。	0.185	4.710	削除	削除
4	仕事を終えた後、失敗したと感じることが多いですか。	0.932	0.330	0.936	0.328
5	立てた計画は、うまくできる自信がありますか。	0.668	0.954	0.659	0.961
6	何かしようとする時、それができるか不安になることが多いですか。	2.035	1.048	2.108	1.035
7	何かを決めるとき、うまくいかないのではないかと不安になることがありますか。	2.116	1.122	2.201	1.107
8	結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでいくほうですか。	0.784	0.068	0.775	0.067
9	どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれないうちがよくありますか。	0.800	0.771	0.815	0.762
10	友人よりも特に優れた知識を持っている分野があると思いますか。	0.350	0.449	0.332	0.470
11	困難に出会うとすぐにあきらめてしまいますか。	1.282	-0.464	1.293	-0.462
12	積極的に活動するのは、得意なほうですか。	0.856	0.224	0.846	0.223

性 ($\alpha = 0.84$) と妥当性 (内容的妥当性, 臨床的妥当性, 基準関連妥当性) は確認されている。「大学不適応」から5項目, 「日常生活不安」と「試験不安」から4項目を選択し, 適宜表現を変更した。さらに「大学適応」の2項目を新たに作成し, 合計11項目の大学適応感尺度を作成した (表3)。項目の選択には, 論文に記載された因子負荷量と本研究の目的を考慮した。回答は「はい」と「いいえ」の2件法で求めた。

(3) 自己効力感尺度

主観的幸福感は比較的持続する感情であるから, 課題に特異的な自己効力感よりも, 個人特性としての自己効力感が関連すると思った。特性的自己効力感尺度¹³⁾ と一般性セルフ・エフィカシー尺度¹⁴⁾ を参考に, 12項目の自己効力感尺度を作成した。特性的自己効力感尺度は, 23項目からなる1因子の一般的な自己効力感を測定する尺度である。信頼性 ($\alpha = 0.88$) と妥当性 (構成概念妥当性) は確認されている。一般性セルフ・エフィカシー尺度も一般的な自己効力感を測定する尺度である。この尺度は3因子, 16項目からなる。尺度は「行動の積極性」の因子に7項目, 「失敗に対する不安」の因子に5項目, 「能力の社会的位置づけ」の因子に4項目をもつ。信頼性 (再検査相関 $r = 0.83$, 折半法 $r = 0.84$, 内部一貫性 $r = 0.74$) と妥当性 (内容的妥当性, 併存的妥当性, 臨床的妥当性, 因子的妥当性) は確認されている。本研究では, 特性的自己効力

感尺度から6項目, 一般性セルフ・エフィカシー尺度からは, 行動の積極性の2項目, 失敗に対する不安の2項目, 能力の社会的位置づけから2項目を選んで, 適宜表現を変えて12項目を作成した (表4)。回答は「はい」と「いいえ」の2件法で求めた。

(4) 性格の Big Five の尺度

現在, 性格特性といえはまず Big Five が挙げられる⁹⁾。Big Five とは, 人の性格の違いを記述する際に必要な特性は5つあるとする考えで, 1990年代以降世界中の多くの性格研究者の支持を得ている。Big Five に含まれる性格特性は, neuroticism (神経症傾向), extraversion (外向性), openness (開放性), agreeableness (調和性), conscientiousness (誠実性) である。かっこ内の訳語は日本語版 NEO-PI-R¹⁵⁾ の訳語を使用した。性格の5因子を測定するために, 全項目60からなる NEO-FFI を実施した。NEO-FFI は信頼性と妥当性が確認された尺度である。回答は「非常にそうだ」から「全くそうでない」の5段階で求めた。

2) 手続き

(1) 実施

1年生は4種類全ての調査質問紙に回答した。2～3年生は性格の Big Five の質問紙を除く3種類の質問紙に回答した。参加者人数は, 質問項目全てに回答した参加者数である。回答は授業単位で教員により質問紙が配布され, 参加者はその場 (授業内) で回答し

た。

(2) 分析方法

尺度作成には、項目反応理論 (Item Response Theory) を使った。項目反応理論を用いると、古典的テスト理論とは異なり、各質問項目の反応特性と質問紙全体の情報量を得ることができる¹⁶⁾。本研究では、以下に述べる質問項目の反応特性を表す2つの項目母数 (項目の識別力と潜在特性上の位置) と尺度の信頼性の指標となる測定標準誤差を報告する。

本研究が使用した主観的幸福感尺度、大学適応感尺度、自己効力感尺度については、項目反応理論の2母数ロジスティックモデルを適用したので、分析に際して項目の識別係数と位置係数が得られる。識別係数は、反応の「はい」と「いいえ」の反応が潜在特性値の関数としてどのように変化するかを示す数値であり、具体的には累積正規分布の形をした反応曲線の縦軸の0.5の値における傾きに対応し、「いいえ」から「はい」に反応が変わる変化の勾配を表わす。位置係数は、「はい」と「いいえ」が50%の確率で生じると推定できる潜在特性上の位置を表す。位置係数は、「いいえ」と「はい」の回答の分岐点 (中間点) を示すと解釈できる。許容できる識別係数と位置係数に関する客観的基準はないので、本研究では $0.3 < \text{識別係数} < 3.0$ の範囲を適切な識別力、 $-2.5 < \text{位置係数} < 2.5$ の範囲を適切な位置と決めた。この基準は、適度に識別力 (ある特性を持つ人と持たない人を識別) がある項目を含むことと、極端に特性が大きくないと「はい」の回答が得られない項目を排除するために設定した。

尺度の信頼性を検討するために、尺度全体の情報量を使用した。項目反応理論を使うと尺度が持つ情報量 (テスト情報量) を計算できる。テスト情報量から測定誤差を導きだせるため (テスト情報量の正の平方根の逆数が尺度の標準誤差に対応する)、尺度の信頼性の指標として尺度の測定誤差を調べる方法がある。どの程度の標準誤差までを許容するかは、研究目的によるが、本研究では0.5の数値を目安とした。識別係数もしくは位置係数が許容範囲から逸脱した項目を不良項目と定義した。さらに項目反応理論を利用すると、直接個人の尺度値を計算できる。通常使用される項目ごとの素点を加算した尺度値に比べ、と項目反応理論を利用した尺度値のほうが正確な値となる場合が多い。なお、項目反応理論の適用およびそのほかの統計処理にはRを使用した^{17, 18)}。

(3) 調査時期

2018年10月から2019年2月の間に調査を実施した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、新潟リハビリテーション大学の倫理委員会の承認を得て行われた (承認番号136)。調査対象者には文書と口頭で調査の趣旨および、対象者の自由意志に基づく調査であること、調査結果は本調査の目的以外では使用しないこと、結果は集団として統計処理され、個人が特定されることがないことを説明し、同意書に署名をえた。

また、本研究 (調査) は大学教育改善の一環であることを説明し、それに必要な対応 (論文化や教育体制の検討など) を図ることへ理解を求めた。そのうえで、本研究へ参加しないことにも何らの不利益はないことを強調し説明した。

Ⅲ 結果

1. 尺度の特性と基礎統計量

1) 主観的幸福感尺度

反応の相関行列から、項目6と7が逆転項目であることを確認した。これらの項目の反応方向を反転させた後に、調査参加者100名のデータに対して項目反応理論を適用し、尺度の特性を検討した。項目の識別係数と位置係数を表2に示した。分析方法で述べた基準に照らすと、不良な項目はなかった。信頼性の指標となる尺度の測定誤差を尺度値の関数として図1に示した。尺度値の-1.5~0.5の範囲内では、標準誤差が0.5程度であり、高い幸福感の値に対して精度が十分ではないと判断できた。最後に、項目反応理論を適用して尺度値を計算した。全参加者をまとめた基礎統計量と尺度が測定できる最小値と最大値を表5に示した。主

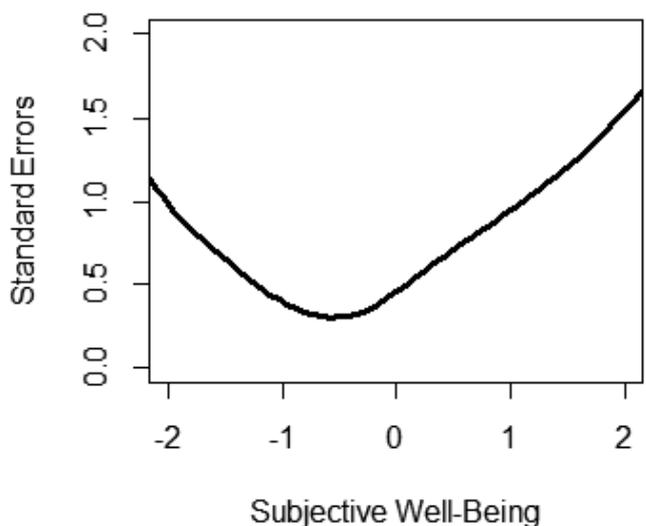


図1 主観的幸福感尺度の信頼性を標準誤差で示した。

表5 主観的幸福感、大学適応感、自己効力感の平均と標準偏差、得点範囲

	得点範囲	平均	標準偏差	測定可能範囲
主観的幸福感	-1.36~1.11	0.01	0.75	-1.36~1.11
大学適応感	-1.82~0.76	-0.08	0.75	-1.82~0.76
自己効力感	-1.38~1.82	0.04	0.85	-1.38~1.82

得点範囲は、全参加者の得点の最小値と最大値による範囲である。

測定可能範囲は、使用した尺度が作りだせる数値の範囲である。

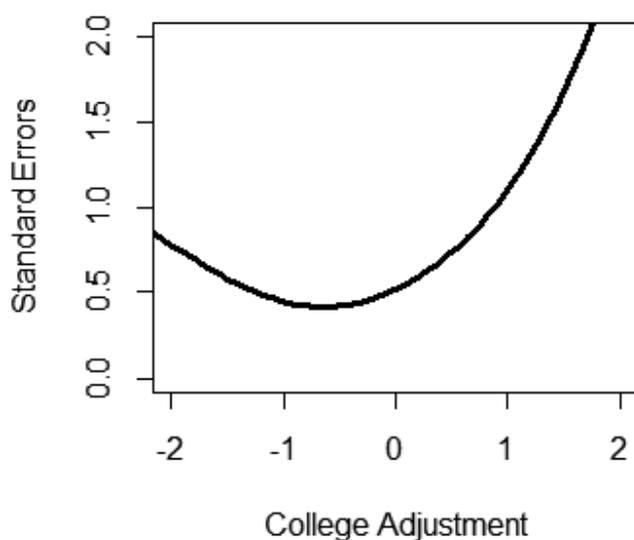


図2 大学適応感尺度の信頼性を標準誤差で示した。

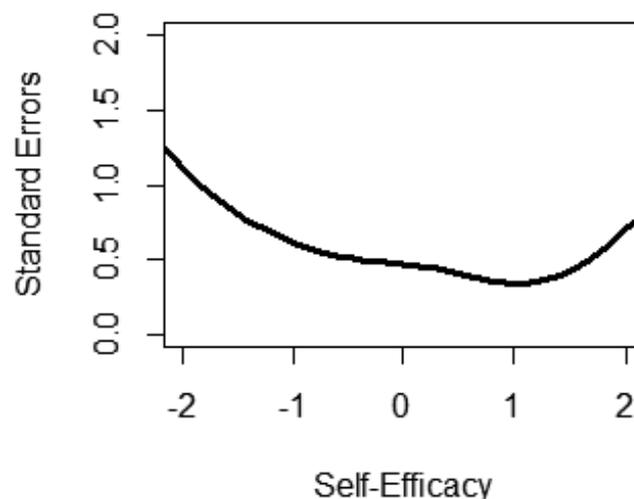


図3 自己効力感尺度の信頼性を標準誤差で示した。

観的幸福感尺度の測定可能範囲はポジティブ方向で限界があり (1.11), 0.5以上の値で精度が低いことと合わせると, この尺度は幸福感が高い学生を適切に評価していないであろう。質問項目を見ると, 大部分で位置係数がマイナスであり, 尺度上で程度が低くてもポジティブな方向の質問で「はい」と回答しやすいことがわかる。反対に, 尺度の下限は低い幸福感を数値化できる (-1.36)。幸福感が低い学生を適切に検出できるため, 学生の健康管理の点からは好ましい特性かもしれない。

2) 大学適応感尺度

大学適応感尺度は, 適切に構成されるならば学生の適応状態を表す有益な指標となる。項目に対する反応の相関行列から, 項目1, 2, 5, 6, 8, 9, 10, 11が逆転項目と確認されたので, 逆転項目に対しては反応を逆転した後に, 調査参加者100名のデータに対して項目反応理論を適用し, 尺度の信頼性を検討した。項目の識別係数と位置係数(表3)を見ると, 項目8, 9, 10, 11は識別係数が基準より小さく, また項目8, 9, 11は位置係数が極端に大きいため, これらの項目を不良項目と判断した。不良項目を除いて,

項目母数を再度計算したところ, 今度は項目母数の値は適当であった(表3の項目母数2回目)。信頼性を見るために, 尺度の測定誤差を尺度値の関数として図2に示した。図2から尺度値が-1.0~0.0の区間は標準誤差が0.5程度で, 測定の精度は高いが, その区間の外では精度が十分ではなかった。最後に, 項目反応理論を適用して, 尺度値を計算した。全参加者をまとめた基礎統計量と尺度が測定可能な最小値と最大値を表5に示した。

大学適応感尺度の測定可能範囲はポジティブ方向で明らかに限界があり (0.76), また0以上の値で精度が低いことと合わせると, この尺度は肯定的な大学適応感を持つ学生を評価するには十分ではなかった。換言すれば, この尺度は軽い大学不適應に関しては精度が良いが, やや大きな不適應得点 (-1.5など) と適應者の得点は額面どおりに解釈できない。さらに, 近年の大学では, 学業などに価値をおかない学生も多数いるため, 大学生活に対する様々な主観的意味づけを考慮して, 大学環境への主観的適應感覚を測定する尺度が必要であろう¹⁹⁾。

3) 自己効力感尺度

表 6 大学適応感と他の測度との相関

	大学適応感	自己効力感
主観的幸福感	0.50	0.49
大学適応感	-	0.20

表 7 主観的幸福感を目的変数とした重回帰分析結果

	標準偏回帰係数	p
大学適応感	0.431	<0.01
自己効力感	0.354	<0.01

調整済み重相関係数は0.40

表 8 主観的幸福感と Big Five 性格特性の相関

	神経症傾向	外向性	開放性	調和性	誠実性
主観的幸福感	-0.18	0.40	0.06	-0.06	0.64
神経症傾向	-	-0.18	-0.13	0.19	0.01
外向性	-	-	0.18	0.10	0.34
開放性	-	-	-	0.15	0.39
調和性	-	-	-	-	0.14

表 9 主観的幸福感を目的変数とした重回帰分析結果

	標準偏回帰係数	p
神経症傾向	-0.130	0.195
外向性	0.114	0.141
開放性	-0.291	0.061
調和性	-0.098	0.364
誠実性	0.479	<0.01

調査参加者100名の反応の相関行列から、項目2, 4, 6, 7, 9, 11が逆転項目であることが確認されたので、これらに対しては反応を逆転して分析を進めた。このデータに対して上述の手順を踏み、項目反応理論を適用し、識別係数と位置係数を求めた(表4)。項目3の位置係数が基準を超えていたので、不良項目と判断した。不良項目を除いた後に再度項目母数を計算したところ、今度は全ての項目母数が適当であった(表4の項目母数2回目)。尺度の測定誤差を尺度値の関数として図3に示した。尺度値の-1.0~+1.5の区間は標準誤差が0.5程度であり、適切な尺度と判断できた。最後に、項目反応理論を適用して尺度値を計算した。全参加者をまとめた基礎統計量と尺度が測定可能な最小値と最大値を表5に示した。この尺度は、ネガティブ方向とポジティブ方向の両方向の比較的広い範囲にわたって回答者の自己効力感を測定することができた。

4) 性格の Big Five の尺度

Big Five 尺度の全ての項目に回答した1年生40名のデータを分析対象とした。NEO-FFIには各性格特性について12項目の質問があるが、本研究では先行研究¹⁰⁾にもとづいて各特性5項目を選び、その項目パラメータを利用して分析を進めた。尺度の信頼性は既に確認されている。Big Fiveの特性名に関しては、いくつか異なる日本語訳があるが、本研究ではNEO-FFI日本語版の訳語を採用した。

2. 主観的幸福感と大学適応感、自己効力感の関連

主観的幸福感と大学適応感と自己効力感の間に関連があり、表6に相関係数を示した。大学適応感と自己効力感が独立に主観的幸福感に影響する程度を推測するために、大学適応感と自己効力感を説明変数とし、主観的幸福感を目的変数として重回帰分析を行った。その結果を表7に示した。2つの説明変数はともに主

観的幸福感に正の効果をおよぼしていた。大学適応感が高い学生は低い学生に比べて、主観的幸福感が高い傾向があり、また、自己効力感が高い学生は低い学生に比べて、主観的幸福感が高い傾向があった。重相関係数は0.40と高く、大学適応感と自己効力感が主観的幸福感の個人間変動の40%を説明すると考えられる。

3. 主観的幸福感と Big Five の性格特性の関連

主観的幸福感は、性格特性のうち外向性と誠実性に関連が認められた。表8に相関係数を示した。さらに表8からわかるように、性格特性の間で相関が認められた。本来 Big Five の性格特性は互いに独立と考えられており、通常、相関は小さいが、NEO-FFI の信頼性を検討した研究では、NEO-FFI の尺度には外向性と開放性の間に負の相関 (-0.25)、外向性と調和性の間に負の相関 (-0.29)、外向性と誠実性の間に正の相関 (0.26) が見いだされている¹⁰⁾。そこで相関の影響を取り除いて、各特性が独立に主観的幸福感に関連する程度を推定するために、重回帰分析を行った。説明変数を5つの性格特性とし、目的変数を主観的幸福感とした。主観的幸福感と実質的な関連を持つ特性は誠実性だけであった(表9)。

IV 考察

1. 使用した尺度について

古典的テスト理論に従った尺度作成では、尺度の信頼性は通常クロンバックの α 係数が使われる。この方法は、項目間の相関に基づいて尺度に含まれる項目が同じ概念を測定しているかを調べるものであり、尺度全体の信頼性を検討するが、個々の測定値の信頼性を検討することはできない。これに対して、項目反応理論を使う利点は、尺度の信頼性を連続する尺度値に対する測定誤差(もしくは情報量)という観点から吟味できることである。そのため個々の測定値に対してどの程度信頼できるかを直接検討することができる。

使用した主観的幸福感の尺度は、低い幸福感は適切に数値化できるが、高い幸福感を正確に測定するには不向きである。大学適応感尺度も同様に、不適応者の適応感を調べるのには適切であるが、適応感が高い学生の適応感を数値化するには不十分である。これに対して、自己効力感の尺度は、広い範囲の自己効力感を数値化できる特性があった。

なお、本研究では、既存の尺度を修正した尺度を使って主観的幸福感、大学適応感、自己効力感、Big Five の性格特性を測定した。使用した尺度の信頼性

は上記のように詳細に検討したが、妥当性については上記の資料以外の資料を新たに得て検討してはいない。理由の1つには、実施された尺度の修正は、項目数の縮減と反応選択肢の縮減であるため、本研究の尺度と元の尺度の間には十分な相関を仮定できた(基準関連妥当性)。2つ目に項目は多少表現を変えているが、内容は基本的に同じであった(内容妥当性)。これらの理由からひとまず妥当性を仮定できると考えた。厳密な妥当性の検証には、実際に元の尺度と本研究で使用した尺度を平行して実施し、併存的妥当性を確認する必要がある。残された課題の1つである。

2. 主観的幸福感と大学適応感、自己効力感の関連

調査対象とした大学生の主観的幸福感、大学適応感と自己効力感の両方に独立に関連を持っていた。著者たちの知る範囲では、3変数の間のこのような関連は、まだ報告されていない。大学適応感が高い学生は、主観的幸福感が高いという結果は先行研究の結果に一致する⁴⁾。日本人と中国人留学生の主観的幸福感を調べたこの先行研究⁴⁾は、学校適応感が主観的幸福感に影響するかはまだ明らかになっていないとして、日本人と中国人留学生を対象に調査を行った。参加者を学校適応感の程度から適応高、適応中、適応低の3群に分けて、群別に主観的幸福感の違いを比較した結果、大学適応感が高い群は低い群よりも、幸福感が高かった。この先行研究では、自己効力感の影響は調べられていない。本研究は、医療系大学生においても主観的幸福感と大学適応感の間に同様な関連があることを見出した。学校に適応していれば、学業や人間関係など学校における経験は一般にポジティブな傾向があり、このポジティブな経験は本人の肯定的感情を促進し、幸福感に反映されるであろう。

なお、医療系大学生と非医療系大学生の間に違いがあるかどうかは、興味深い問題であるが、先行研究と本研究は使用した質問紙と分析方法が異なるため、直接結果を比較することはできない。この段階では、医療系大学生と非医療系大学生に共通して、大学適応感と主観的幸福感の間に同じような関連があるとまとめることができる。

自己効力感についてはどうだろうか。大学における成功経験や達成感、自己効力感を高めると同時に、大学への高い適応感をもたらす。その結果、幸福感が高くなると推測できる。しかし、この考えは、自己効力感が大学適応感を介して主観的幸福感に影響するというモデルと同じことである。本研究のデータは、自己

効力感が大学適応感とは独立に主観的幸福感に影響することを示唆している。主観的幸福感におよぼす自己効力感と時間管理能力の影響を調べた先行研究も自己効力感から主観的幸福感への直接の影響を見出している⁷⁾。時間管理を含んだこの研究⁷⁾の特色は、時間管理は自己効力感を媒介にして精神的健康に影響を及ぼすと考えた点である。重回帰分析を使って、時間管理、自己効力感、主観的幸福感の3者の関連を分析して、最終的に時間管理が自己効力感を介して主観的幸福感に影響するという結論に至った。この先行研究と本研究はともに、自己効力感が主観的幸福感に影響する結果を得た。本研究に比べると先行研究の結果は、自己効力感が概してより強く主観的幸福感に影響するという結果であった(標準化偏回帰係数が0.33~0.6)。数値の小さな違いと使用した尺度の違いを考慮すると、対象とする母集団の違いに不一致の原因があるとは考えがたい。非医療系学生と医療系学生では同じように自己効力感が主観的幸福感に影響すると解釈できる。自分には能力があるという信念や、目的を達成するための行動をとれるという信念、あるいはこれまで物事に上手く対処できたという気持ちは、それ自体で肯定的な自己感覚を生み出し、主観的幸福感に重なっていると解釈することができる。

理論的に相関をどう解釈するかは重要な問題であり、それがたして因果か相関か、あるいは同一のものかという議論は軽視すべきではないが、実際の見地も同様に重要である。すなわち、大学生の幸福感には大学適応と自己効力感が関連しているのであるから、幸福感を高める目的に対して、とりあえず大学適応感と自己効力感を増大させる様々な方策は効果を有する可能性がある。例えば、友人関係が大学満足に影響し、また授業理解の困難さが大学不適応に影響するという結果が報告されている²⁰⁾。したがって、友人関係を充実させる機会を大学が用意するのも1つの方法であろう。また、学生の授業理解を向上させる学習支援は、大学適応感を増大させ、その結果幸福感を上昇させると期待できる。

医療系大学の場合、学生らの将来設計は自ずと明らかといえる。各専門職をめざすということは、換言すれば他に選択の余地が少ないことでもある。そうしたなかで学生の幸福感を高めるために大学適応感と自己効力感を刺激する必要があるとすれば、一つには各専門職種の多様な実際を早い段階から示すことではないだろうか。

大学生とはいえ、入学時に特定の専門職種を選択す

るといことは、それに必要な情報収集はさらに早い時期(高校生・中学生時代など)のものであり、情報が偏っていたり誤解をしていたりすることもあり得る。そうした情報の再統合は入学以降、各教員からの専門職観などを通して図られるものであろう。国家試験を目標とする知識到達は必須であるが、それぞれの専門職の実際を教員はじめ学外の専門家などから吸収できることが、結果として適応感や効力感を増幅させると考える。

さらには、大学入学前に学生の将来設計が少ない情報量のなかで構築されたものだとすれば、上述のような情報再統合の結果として、めざす専門職種を変更しやすくすることも適応感と効力感に対して有効なはずである。こうした試みの結果をみて再度教育体制を考えるという見地も、学生支援の方法として容認されるべきであろう。

3. 主観的幸福感と Big Five の性格特性の関連

主観的幸福感と関連を持つ Big Five の性格特性は、誠実性であった。誠実性は勤勉性ともよばれるが、物事に一生懸命に取り組む傾向を表わす。目標や課題を達成すること、計画を立てること、秩序を好むことも含まれる。さらに、有能感も含まれるので、自己効力感に近い関係がある。先行研究では、若年者においては人生満足感に影響する性格特性は男性では外向性と調和性が大きく、女性では開放性と非神経症傾向(情緒安定性)が大きい結果であった⁹⁾。2つの研究結果の違いには、対象集団の違いが影響した可能性があるが、本研究の対象者の数が40人と少ないため、より大きな参加者による調査結果を見るまでは判断は控えるべきであろう。

医療系大学では、学生が病院等の施設で実習をすることが多い。実習は学生にとって大きなストレスであり、心身の健康に対する影響もあるため、大学は様々な対処を準備している。ストレスのチェックとならんで主観的幸福感のチェックを実施することは、学生が支障なく学業を進める上で有用な方策かもしれない。

V 結論

医療系大学生の主観的幸福感は、大学適応感および自己効力感と関連があった。大学適応感と自己効力感の間にも相関が見出された。自己効力感が大学適応感を介して、主観的幸福感に影響をおよぼす可能性も想定できたが、分析結果から、自己効力感と大学適応感が独立に主観的幸福感に影響することを確認できた。

性格特性との関連をみると、Big Fiveの中の誠実性が、主観的幸福感にポジティブに影響していた。

これらからみて、学生の大学適応度と自己効力感、また主観的幸福感を折々に評価しつつ、それらの関わりを教育体制のなかで検討する必要があるだろう。

謝辞

本研究は、新潟リハビリテーション大学学長裁量経費の補助を受けて実施されました。本研究の調査に参加してくれた学生へ感謝します。また、調査実施を手伝ってくれた教職員の皆様に深く御礼申し上げます。また、匿名2名の査読者のコメントは本論文の完成度を高めるために有益でした。記して感謝いたします。

文献

- 1) Diener, E, Suh,E.M., Lucas,R.E., et al. : Subjective Well-Being: Three Decades of Progress, Psychological Bulletin, 125:276-302, 1999.
- 2) 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討，名古屋文理大学紀要，6:29-36, 2006.
- 3) 谷島弘仁：大学生における大学への適応に関する検討，人間科学研究（文教大学人間科学部），27:19-27, 2005.
- 4) 祁秋夢，浅川潔司，福本理恵，他：大学生の主観的幸福感と大学適応感の関係に関する日中比較研究，学校教育学研究，23：35-42, 2011.
- 5) Bandura, A.:Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change, Psychological Review, 84:191-215, 1977.
- 6) Hills,P., & Argyle,M.: The Oxford Happiness Questionnaire: a compact scale for the measurement of psychological well-being, Personality and Individual Differences, 33:1073-1082, 2002.
- 7) 伊藤萌恵，原口雅浩，徳田智代：大学生における時間管理が主観的幸福感に及ぼす影響，久留米大学心理学研究，18：21-30, 2019.
- 8) 堀毛一也：主観的充実感とビッグ・ファイブ，現代行動科学会誌，15:1-8, 1999.
- 9) McCrae, R.R., & Costa, P.T.: A Five-Factor Theory of Personality, Pervin, L.A., & John, O.P. (Ed.) Handbook of Personality, Second Edition, The Guilford Press, New York, 1999, 102-153.
- 10) 阿久津洋巳：日本版 NEO-FFI の信頼性の検討，岩手大学教育学部年報，77:55-70, 2018.
- 11) 伊藤裕子，相良順子，池田政子，他：主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討，心理学研究，73:276-281, 2003.
- 12) 藤井義久：大学生不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討，心理学研究，68:441-448, 1998.
- 13) 成田健一，下仲順子，中里克治，他：特性的自己効力感尺度の検討，教育心理学研究，43:306-314, 1995.
- 14) 坂野雄二，東條光彦：一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み 行動療法研究，12:73-82, 1986.
- 15) 下仲順子，中里克治，権藤恭之，他：NEO-PI-R NEO-FFI 共通マニュアル 東京心理株式会社，1999.
- 16) 豊田秀樹：項目反応理論 [入門編]，朝倉書店，東京 2002.
- 17) Rizopoulos, D : An R package for latent variable modeling and item response theory analyses, 2006.
- 18) RC Team: R: A language and environment for statistical computing, 2018.
- 19) 大久保智生，青柳肇：大学生用適応感尺度の作成の試み，パーソナリティ研究，12:38-39, 2003.
- 20) 中村真，松田英子：大学生の学校適応に影響する要因の検討，江戸川大学紀要，23：151-160, 2013.

Effects of the Senses of College Adjustment and Self-Efficacy on Subjective Well-Being in Healthcare College Students

Akutsu Hiromi *, Ohya Kaoru, Wakamatsu Naoki

Niigata University of Rehabilitation

[Received: 30 September, 2019]

[Accepted: 25 November, 2019]

Key words: healthcare college students, subjective well-being, college adjustment, self-efficacy

Abstract Happiness of college students is an important factor in fulfilling college life and has a direct relationship with health, adjustment, and school work. The effects of lower happiness or a complete lack of happiness can be significant and lead to extended leave of absence or complete withdrawal from college due to the inability to adjust. Students involved in health care courses are not only at risk for reasons already stated but have the additional stressors of off-campus practical training and national examines in order to practice their skills professionally. Due to these increased daily stressors, well-being is an important consideration when discussing these students. Our hope to understand and improve practical care for students, we investigated Subjective Well-Being, personal perception of college life adjustment, and self-efficacy for the health care college student through questionnaires. We thoroughly examined the reliability of the scales in the questionnaires by applying analysis of the Item Response Theories, although validity is less certain. We administered a Big Five questionnaire to a selection of the same students. We found that Subjective Well-Being was positively correlated to the sense of adjustment to college life as well as self-efficacy. Regression analysis revealed that the sense of adjustment to college life and self-efficacy had substantial effect on the Subjective Well-Being independently. About 40% of the variance in the Subjective Well-Being were accounted for by these two factors. As for personality traits, we found that conscientiousness influenced Subjective Well-Being as well. These results suggested that with an improved adjustment self-efficacy will improve Subjective Well-Being. Practical plans and actions were discussed in regards to the healthcare college students which included additional information for professional jobs as well as testing practical approaches that may lead to increased self-efficacy and adjustment to college life.